ネクロマンサー奔走記すぴんあうと的番外編『冥王様がゆく』

闇谷　紅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ネクロマンサー奔走記すぴんあうと的番外編『冥王様がゆく』

【Ｎコード】
Ｎ６８０９Ｙ

【作者名】
闇谷　紅

【あらすじ】
乱世をおさめ平和な世界を作ることを神々に依頼され異世界トリップした一人の男は『冥王』と名乗り、授けられた力を駆使して奔走する。
しかし、前途は多難で男は多忙だった。
チートじみたアンデッド作成能力を始めいくつかの力と副産物、知恵と仲間、その他諸々に助けられ目的を果たさんとする『冥王』のあまり知られざる日々――。

時には仲間と馬鹿をやり、時には現実逃避や憂さ晴らし、はたまた軍資金の調達など本編には出てこない小さな逸話を今、ここに。

＊本作は自作の別連載作品「ネクロマンサー奔走記」の番外編および補足的なものとなります。
本編を見ていることを前提に話が進みますのでご了承下さい。

ごあいさつ（注意書き）

●ごあいさつ
いつもネクロマンサー奔走記を見て頂いている皆様、ありがとうございます。
こちらは「忙しくて本編書く時間がないもののずーっとお待たせするのも申し訳ないので」と言う理由から思いつきで始めてみる番外編になります。
基本台詞とＳＥのみ、他は何もなしという「ただ書きやすさのみ」を重視したスタイルにするかわり出来る限り高い頻度で更新する予定（あくまで予定）。
よって、以下の様なモノにもなります。

・本編を見てることを前提で話は展開します。
・一話は短いモノでは四コマ漫画レベルの短さです。
・本編書ける様な時間が出来た場合は当然本編の進行を優先します。
・シリアス分少なめ、きっとギャグっぽくなります。
・こっちの話を本編側に反映する可能性はあり。
・自己満足分多め。
・一応本編で説明できなかったことの補足なんかをするかも知れません。
・投稿自体テスト段階なので予告無く打ち切る可能性もあり。
（本編が進まなくなるなど悪影響が出た場合）

以上を踏まえた上で、暇つぶしにでもして頂ければ幸いです。

冥王様とギルド１（本編・第十三話後～）（前書き）

第十二話で山賊に囚われていた村人を保護。
飼うと言う名目で匿うことにした『冥王』だったが、生者はアンデッドと違い物いりで――。

冥王様とギルド１（本編・第十三話後～）

冥王「戯れに人を飼うことにしたが、ならば先立つものも必要不可欠であろう？」
参謀「確かにそうじゃの。して、どこに転送すればよろしいか？」
冥王「大都市だ。人の多いところならば仕事も転がっていよう」
参謀「なるほど。と言うことはギルドが有る都市の方が良いじゃろうな」
冥王「ほう、ギルドというと登録者に仕事の斡旋をするあのギルドか」
参謀「うむ、おそらくはそのギルドじゃの」
冥王「よかろう。ならば行く先は任せよう」
参謀「任されよ。では」

ばしゅっ

冥王「ほう、中々栄えた都市ではないか」
参謀「戦乱の世とはいえ大国ならばこういう都市も結構あるのじゃよ」
冥王「ふむ。ならば早速ギルドへ向かうとしよう」
参謀「じゃの」

冥王「いざ冒険者ギルドへ」
参謀「いざ傭兵ギルドへ」

二人「「は？」」

冥王様とギルド２（前書き）

戦乱の世と言うことで『冥王』の想定していた冒険者ギルドは世界に存在しなかった。
代わりに傭兵ギルドが存在すると参謀である魔導死霊から説明を受けた『冥王は』気を取り直して傭兵ギルドへと向かう。

冥王様とギルド2

冥王「まさか冒険者ギルドが存在せぬとはな」
参謀「どちらかと言えば必要とされる人手は兵の方が多いのじゃよ」
冥王「これも乱世ゆえか」
参謀「じゃの。おお、あれが傭兵ギルドじゃ」
冥王「ふむ。しかし、今更だがこの格好で問題なかろうか？」
参謀「大丈夫じゃろ。冥王殿が派手に回復魔法を行使した戦場からはそうとう離れとるし、ワシも人間の幻影を被せてカモフラージュさせて貰っとるしの」
冥王「そうか」
参謀「そういうことじゃよ。ではワシから先に入ろうかの。冥王殿はついてきて下され。御免」

ぎぃっ、からんからん

受付嬢「いらっしゃいませぇ。えぇっと、当ギルドにご依頼ですか？」
参謀「いや、ワシらはちと物いりで仕事を探しとってな」
受付嬢「あぁ。初めて見る方ですしぃ、と言う事は傭兵登録にいらしたんですねぇ？」
冥王「そう言うことだ」

受付嬢「……」
冥王「……」

参謀「ま、まぁ……そう言う訳で登録させて欲しいんじゃがの」
受付嬢「あ、わ、わかりましたぁ。では、こちらの用紙に必要事項

を明記して提出して下さいねぇ」

冥王「っ！」

参謀「うん？　どうなされた？」

冥王「……向こうの机に移るぞ」

参謀「（ここでは話せぬ、と言うことかの）……承知じゃ」

とたとた

冥王「参謀殿、名前どうしましょう？　すっかり忘れてたんですが冥王とは書けませんし（ひそひそ）」

参謀「ふむ、じゃったら本名を書いてはどうじゃの？　お前さん、周囲の者にも『冥王』としか名乗っとらんじゃろ？（ひそひそ）」

冥王「で、ですけど安易にここで本名書いて後々何かの問題になるかも（ひそひそ）」

受付嬢「あのぉ、書けましたぁー？」

冥王「っ？！」

冥王様とギルド３（前書き）

ギルドへ登録に来たというのに偽名も考えてなかった『冥王』。
受付嬢の催促する様な声に焦ってしまい、軽いパニックに。

冥王様とギルド3

冥王「さ、参謀殿どうしましょう？（ひそひそ）」
参謀「どうしようと言われてもの（ひそひそ）」
冥王「そもそも参謀殿はどうするんです？　大魔術師だったんでしょう、本名だったら悪目立ちするんじゃ？（ひそひそ）」
参謀「む、盲点じゃったわ（ずーん）」

受付嬢「あのぉ……」

冥王「っ！（こうなったら適当に……えーと、名前、名前……）」

コツコツ

冥王（こうなれば自棄だ。どうせ小銭稼ぐ為だけの名前なんだし）

カリカリ

参謀「むぅ……」
冥王「参謀殿、思いつきませんか？　だったらこの名前使って下さい」

サラサラ

参謀「おぅ、すまんの」

冥王「待たせたな、これが書類だ」

受付嬢「はい、書けたんですね。　えぇと、『魔王ニトーヘン・サ

ンカッケー』さんと『魔術師セイ・サンカッケー』さんですかぁ変わった名前ですけどぉ……」

冥王「姓が同じなのは親戚だからだ」

受付嬢「……いえ、そうじゃなくてですねぇ。魔王っていうのはぁ」

冥王「依頼人に顔を覚えて貰える様なインパクトと他者に軽んじられない事を加味したらそうなった。そもそもこの欄は自称でも構わぬのだろう？」

参謀（それ以前に思いっきり悪目立ちしそうじゃがの……）

受付嬢「……わかりました、魔王で良いです」

冥王様とギルド４（前書き）

なんだかんだで無事書類は提出できた『冥王』達。
だが、これで問題解決とは行かなくて。

冥王様とギルド４

受付嬢「ではこちらがギルドプレート――身分証を兼ねた証明書になりますぅ」

つつ

冥王「カードではないのか」
受付嬢「傭兵ですからぁ、カードみたいな薄いものだと戦で破損しちゃうことが多くてぇ、カードはずいぶん前に廃止されてますぅ」
参謀「なるほど、合理的じゃの」
受付嬢「ここに来る人はたいてい知ってる一般常識ですよぉ？（じぃ）」

冥王「ほう、常識か。ククククク……フフフフ……ハーッハッハッハ」
受付嬢「……大丈夫なんですかぁ、あの人？」
参謀「（笑ってうやむやに仕様としたんじゃろうな。献身のフォロー申し訳ない）な、何かがツボにはまったんじゃろ。それより、この後じゃが」
受付嬢「あ、あぁ。そうでしたぁ、お二人には訓練場でこちらの用意した相手と軽く手合わせをして頂きますぅ」
冥王「なるほどな。ど素人を送り出して失敗されてはギルドの威信に関わるが、無名ながらも腕の立つ者であった場合、簡単な仕事を押しつけて遊ばせておくのは損失と言うことだな」
受付嬢「ご明察ですぅ。ではぁ、訓練場は右手のドアから出て伸びた廊下をまっすぐ進んだ突き当たりになりますのでぇ、訓練所に入ったら中にいる者にプレートをお見せ下さい」

冥王「承知した。世話をかけたな」
受付嬢「いえいえ」

がちゃ、ばたん。かつかつかつ……

受付嬢「変な人かと思ったけど、頭が悪い訳ではなさそうですねぇ。だとすると、この魔王ってのにも何らかの意図でもあるんでしょうかぁ？」

冥王様とギルド５（前書き）

実力を測る為に手合わせを要求された『冥王』達。
とはいえ、全力で戦うのは明らかに拙そうで。

冥王様とギルド5

冥王「しかし、手合わせどうします？　全力でやったら騒ぎになりますよね？」
参謀「じゃの。ワシは魔術師で登録したから簡単な魔法でも披露すれば良いじゃろうが」

コツコツ

指導員「入れ」
冥王「良かろう」

がちゃ、すたすた

指導員「……あー、何だ、見ない顔でここに来たって事は新入りか？」
冥王「そうだ」
参謀「じゃな」
指導員「……色々とツッコミたいところはあるがまあいい。とりあえずプレートをこっちに貰おうか」
冥王「うむ、受け取るがいい」
参謀「これでよいかの？」

じゃら

指導員「……おい、魔王ってなんだ、魔王ってなぁ？」
冥王「魔王だが？」
指導員「っ、まあいい。先にそっちから見るか。えー、何だ、魔術

師か。じゃあ、得意な系統の術を使って貰えるか？」
参謀「任されよ」

ばしゅっ

指導員「……あ？　おい、今のって」
参謀「転移魔法じゃが？　壁際に飾ってあった鎧を反対の壁際まで動かした、それだけじゃ」
冥王（まぁ、数十人纏めて数十ｋｍ転移させる参謀殿を僕は知ってるからなぁ）
指導員「あー、セイだったな？　あんたのランクはＡだ」

参謀「ほ？」

指導員「あの鎧は魔法の的に使える様に魔法の掛かりづらい特殊な金属を混ぜ込んであんだよ」

冥王（うわぁ。……って、参謀殿が高評価ってことは親戚設定になってる僕も）
指導員「と、なるとだ。同じ姓って事からしても……」

ちら

指導員「期待して良いんだよな？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6809y/

ネクロマンサー奔走記すぴんあうと的番外編『冥王様がゆく』

2011年11月23日09時05分発行